



じゅんさい池

ガイドブック



目次

- ◆ じゅんさい池公園案内図…………… 1
- ◆ 物見山砂丘とじゅんさい池の生い立ち…………… 3
- ◆ 土地区画整理事業によるじゅんさい池付近の変遷… 7
- ◆ じゅんさい池をとり囲む樹林…………… 9
- ◆ じゅんさい池公園の植物…………… 11
- ◆ じゅんさい池公園の鳥類…………… 12
- ◆ じゅんさい池に住む動物…………… 13
- ◆ じゅんさい池のまわりや林に住む動物…………… 14
- ◆ じゅんさい池が抱える外来種問題…………… 15
- ◆ じゅんさい池の伝承…………… 16
- ◆ 地域の取り組み…………… 18



じゅんさい池公園案内図

【イラスト:太田和宏 デザイン:井上信夫】

アクセス略図

新潟交通 E30系統 新潟駅前発 向陽三丁目行き(または向陽三丁目経由)下山スポーツセンター行き有楽1丁目下車徒歩4分

東区バス 河渡ルート じゅんさい池・幸栄1丁目・中地区コミュニティセンター入口下車

自家用車 新潟バイパス(国道7号)竹尾ICより約15分
日本海東北自動車道新潟東スマートインターから約20分

じゅんさい池公園の概要

所在地:新潟市東区松園2丁目2-1
 総面積:約7.3ha
 1978(昭和53)年 公園一部供用開始
 1981(昭和56)年 全面供用開始

東池

水面面積:約0.3ha
 水面標高*: -0.3m

西池

水面面積:約0.5ha
 水面標高*: -0.3m

*標高は東京湾標準水位を基準とする



中地区コミュニティセンター入口

西池

西池広場

並木の回廊

松林の中の東屋

上道神社(龍神様)

西池を見下ろす東屋

	駐車場		東屋
	バス停		神社
	トイレ		サクラ

0 100

じゅんさい池は物見山砂丘と呼ばれてきた砂丘地の中に自然に形成された砂丘湖で、東池と西池の2つの池からなります。水草のジュンサイが繁茂していたことから、じゅんさい池の名がつけられました。若芽が食用になるジュンサイは、1975年ごろまで河渡地区の特産物として採集されていました。

宅地化の進行などによって池の水が枯涸したため、1980年から工業用水が導入されています。池の枯涸とともにジュンサイも絶滅しましたが、現在は1984年に旧笹神村（阿賀野市）から移植されたものが育っています。

現在、じゅんさい池とその周辺緑地は「じゅんさい池公園」として整備され、多くの市民の方々に親しまれています。



ジュンサイ採り風景

1971年6月17日 森田一郎氏撮影



東池の景観 園芸スイレンが水面をおおう



西池の景観 水面をおおう水草はジュンサイ



とよたけ
豊武稻荷神社



物見山砂丘とじゅんさい池の生い立ち

【澤口晋一】

新潟砂丘は、形成順に新砂丘Ⅰ（7600～4800年前）、新砂丘Ⅱ（4600～1400年前）、新砂丘Ⅲ（1800～900年前）に区分されます。最も新しい新砂丘Ⅲは、海岸線に沿って北は村上から南は角田山北麓まで約76kmの長さに及びます。じゅんさい池を抱くこの一帯の砂丘地は新砂丘Ⅲの

きの大きな砂丘地ですが、そこには長さ1.7～4.5km、幅200～300mほどのはっきりした5列の高まり（砂丘列）と、それに並行する4列の凹地が存在しました（図1）。形態的には横列砂丘とみなされています。その形成は、南端の1列目が最初で、その後凹地（a, b, c, d）を挟みながら5列目まで順を追ってできていったと考えられます。時代的には1100～900年前頃です。

砂丘列の中では、3列目の高まりが幅・高さとも最大で、しかも他の列にはみられない複雑な起伏をもっていたことがわかりました。一方、これに隣接する凹地cは幅が狭いうえに入り組んだ形状をなしており、やはり他の凹地とは大きく異なっています（図1）。

なぜ、この高まりと凹地だけが他と異なる特徴をもっているのでしょうか。それにはパラボリック（放物線）砂丘というちょっと聞きなれない地形が関係しています。そして、これがじゅんさい池の生い立ちのなぞを解く手がかりなのです。



写真1 宅地開発以前の物見山砂丘

1946年撮影
(国土地理院)

中にあり、物見山砂丘と呼ばれてきました。

写真1は1946（昭和21）年に撮影された物見山砂丘の空中写真です。中央部にじゅんさい池が、砂丘地の南端には河渡、松崎の二つの集落が確認できます。

この写真には宅地開発以前に存在していた砂丘特有の地形がほぼ完全な形で写っています。この地形を実体視と呼ばれる手法を用いて判読し、さらに現地調査を実施することで、じゅんさい池の生い立ちを明らかにしました。

1. 物見山砂丘の地形

物見山砂丘は、途切れることのないひと続

2. パラボリック砂丘

パラボリック砂丘は砂丘地に特有の地形で、強風（新潟の場合、冬季の北西風）によって吹抜け凹地と呼ばれる浅い谷状の地形が砂丘の斜面に掘り込まれ、さらにそれを取り囲むように砂が堤防状に堆積することで形成されます（図2イ、ロ）。堤防状に砂が堆積した部分はヘッド、アームと呼ばれま

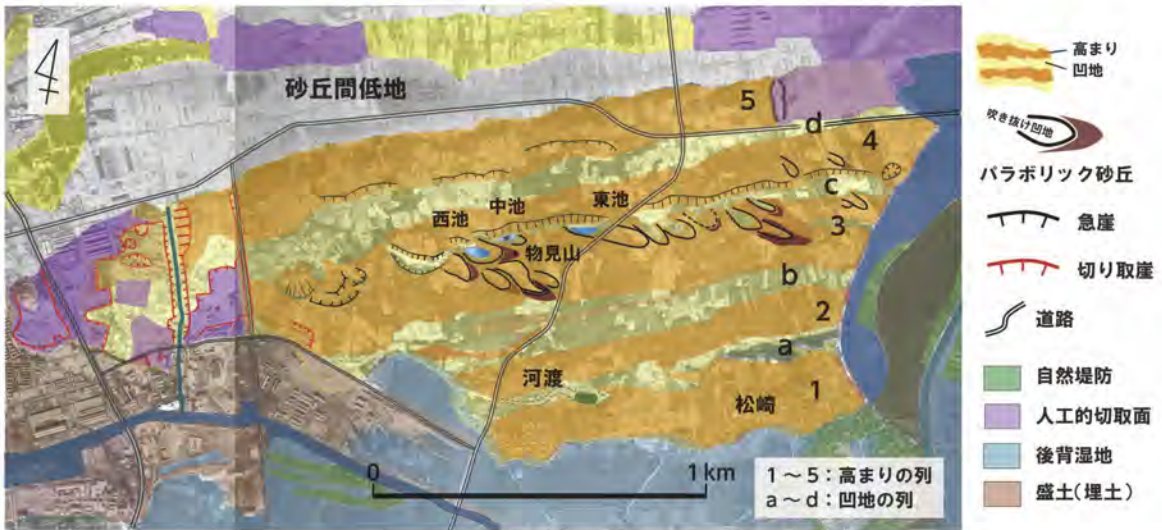


図1 物見山砂丘の地形

澤口(2019)改変

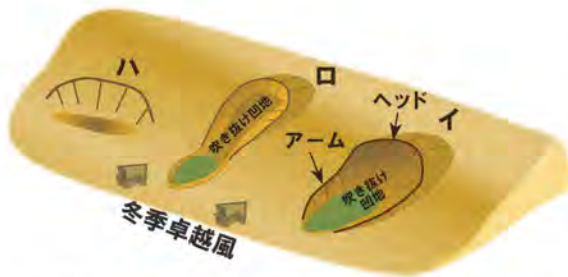


図2 パラボリック砂丘の模式図

すが、ヘッドは発達がよければ三日月形の平面形をもつ小高い丘となります。

図1をみると、Uの字形をした黒い線が凹地cから3列目の高まりに食い込むようにいくつも並んでいることがわかります。実は、この一つ一つがパラボリック砂丘で、U字の線は上述したアームやヘッドに当たる部分に相当します。さらによく見ると、U字の線はすべて北西～西北西に向かって口を開いていることがわかります。このことはパラボリック砂丘が、北西～西北西方向から吹いてくる冬季の季節風によって形成されたことを示しています。しかも、パラボリック砂丘が形成された当時は、4列目の高まりはまだ形成されておらず、3列

目の高まりが季節風に対しての最前線、つまり最も海側に位置していたと考えられます。その後、4列目の高まりが3列目の前面に新たに発達し、風が遮られるようになったことで、パラボリック砂丘の形成は終了しました。

3. じゅんさい池の生い立ち

図3は、じゅんさい池とその周辺の地形の分布を示したものです。この図から西池がパラボリック砂丘の吹き抜け凹地に当たる部分に形成されたものであることは一目瞭然です。また、西池右岸側のアーム(A)は4列目の高まりに覆われていることから、高まりのできる以前はもっと前方に伸びており、西池も今より大きかった可能性があります。かつて物見山(28.7m)と呼ばれていたところは、このパラボリック砂丘のヘッドに相当する部分でした。図2イは西池とそれを囲むパラボリック砂丘の様子を模式的に示したものです。

東池は、道路を挟んでその東方に吹抜け凹地と考えられるUの字形の凹地が続き、さらにその先には凹地を囲むようにアー

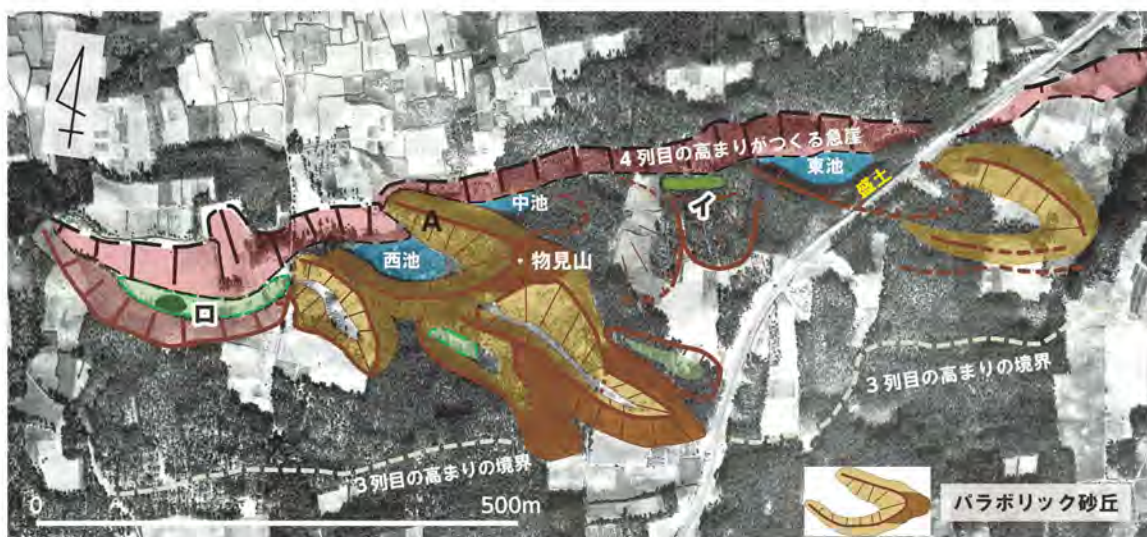


図3 じゅんさい池とパラボリック砂丘の分布

ム・ヘッド状の地形が存在します(図3)。このような地形の配置からみて、東池も西池と同じくパラボリック砂丘の吹き抜け凹地の開口側が湛水したものである可能性が高いとみられます(図2口)。一方、中池の周囲にはパラボリック砂丘であることを示す明瞭な地形はありませんが、その後方には吹き抜け凹地状の浅い凹地が存在することから、パラボリック砂丘のごく初期段階にできた凹地が湛水した可能性があります。

ところで、凹地cにはこれら3つの池のほかにも池が2つ存在していたことが、加藤功氏による調査からわかってきました(図3イ・口)。イは現在でも周囲より少し低いままで、その様子は現地ですぐわかります。口は、3列目の高まりの前面が風食を受けたことでできた円弧状の急崖の直下にあります。もともとは図2ハのように急崖の前面は開けていたのですが、4列目の高まりが前面に形成されたことで両側が囲まれた深い凹地となったと考えられます。なお、1946年(昭和21)10月に撮影された空中写真(図3)ではイ、口ともに水面が確認できないことから、これらは池とい

うよりも湿地に近いもので、雪どけの季節などに一時的に湛水したものであったと推われます。

4. 今に昔を重ね合わせる

ここでは、図3で復元した地形を現在のじゅんさい池周辺の写真に重ね合わせてみます(図4)。

この図から、西池は三方がパラボリック砂丘に、北西側が4列目の急崖に囲まれている様子がわかります。西池が大きな穴の中にあるように感じるのはこのためです。西池の高台にある東屋あずまやはパラボリック砂丘のアームの稜線だった所で、階段はその内側の斜面に設置されています(写真2)。しかし東屋が位置する場所は平坦になっており、稜線という感じはまったくしません。それは、アームの東側に存在した凹地が宅地化によって中池も含めて埋められてしまったからです。一方、東屋から住宅地に延びる歩道は最初に階段があり少し高い所にあります。これこそがアームの稜線でその姿を今にとどめています。

また、上道神社かみみちに対面してすぐ右側には、写真3に示したような松に覆われた小高い



図4 じゅんさい池とその周辺の地形復元

丘があります（図4▲印）。これもアームの名残で上記の歩道とともに地形的には貴重なものです。

東池はもともとアームがはっきりしていなかったこともあり、大きな改変は受けていないようです。ただ、道路を挟んで東側に延びていたとみられる吹き抜け凹地は埋められ、逆にアームは削られて消失しています。

じゅんさい池の形成に直接的に関わった地形のほとんどは現在では、改変もしくは消失してしまっていますが、これまで述べ



写真2 西池と遊歩道



写真3 上道神社とパラボリック砂丘の名残の丘

てきたように、かつての面影がかりうじて残っている個所もいくつかあります。

じゅんさい池は、全国的にみても非常に珍しい生い立ちをもつ水域であり、新潟市にとっては貴重な自然遺産です。地形は自然環境の基盤となる重要な要素です。このことを認識したうえで長く保存していくことが必要です。

文献

鴨井幸彦・田中里志・安井賢（2015）暦年較正年代による新潟砂丘列の形成年代の見直し。第四紀研究，54，139～143ページ。
 澤口晋一（2019）新潟市の砂丘地にみられる湖沼とその成因。平成29年度新潟市潟環境研究所研究成果報告書，4～14ページ。

土地区画整理事業によるじゅんさい池付近の変遷

【加藤 功】

土地区画整理事業と共に砂丘景観は消えた

明治時代の後期に新潟鉄工所が山の下に工場をつくり、石油採掘用の機械や工作機械、車両製造などを始め、工業の町として発展していきました。1929（昭和4）年、新潟市で最初の山の下西部土地区画整理事業（図1①）が東区で行われました。その後戦前には②～⑤の土地区画整理事業が続き、更に戦後の高度経済成長期の1960～1970年代には、⑥～⑧、及び⑪の土地区画整理事業が行



図1 東区の土地区画整理事業（昭和4～平成23年）

われました。

これらによって、じゅんさい池公園と河渡中央公園を残して、物見山砂丘の名称のもととなった物見山（標高28m）や、札木山（標高20m）など、かつての砂丘景観はほぼ消失しました（図4a）。そして平坦化された土地は、松園、太平、向陽、有楽、白銀といった新たな地名の郊外住宅地となっています。

なお、それ以前のこの付近は、起伏の大きな砂丘列が幾重にも連なる中に、マツ林と畑が続く景観が広がっていました（図2）。

かつてこの付近に5つの池が

現在、京都の円山公園から譲り受けた桜の「東池」とジュンサイの復活で知られる「西池」の2つがありますがかつて周辺には、5つの池があったと伝えられています。

1969（昭和44）年に新潟市が作成した地形図（図3）には、西池と東池の間に中池と呼ばれた一回り小さい池が描かれています。さらにこの地形図には、これら3つの池のほかにもう2つの池が描かれています。一つは東池のすぐ西隣に、もう一つが西池の西側の深い弓形の凹地の中にありました。



図3 昭和44年発行の地形図にある5つの池と工業用水供給配管路

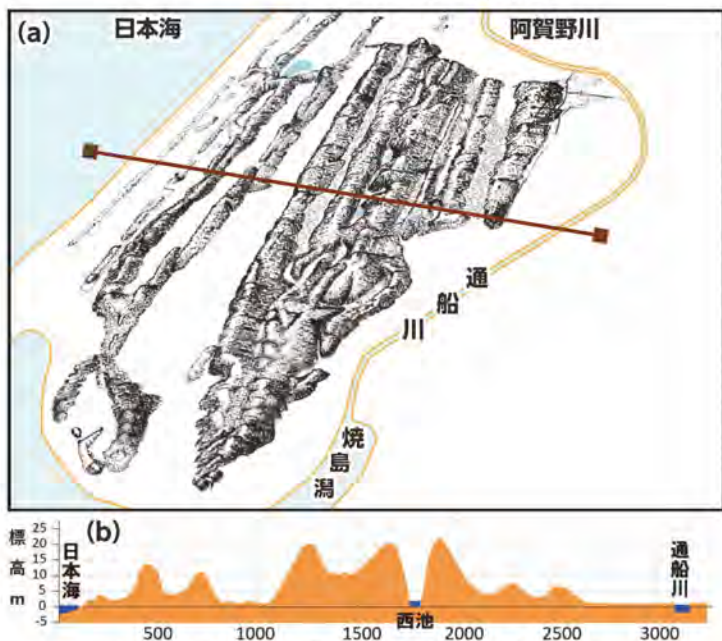


図2 土地区画整理事業前の物見山砂丘の地形(a)と日本海～西池～通船川までの断面図(b)

■ 砂丘池の傾斜を利用したスキー場

この弓形の凹地を囲む斜面は、スキー場として多くの市民で賑わったようです(写真1)。物見山スキー場あるいは河渡スキー場と呼ばれ、1936(昭和11)年3月8日の新潟毎日新聞には「新潟近郊にも絶好のスキー場～大形村河渡に折り紙～」という記事があります。

1968(昭和43)年当時、新潟大学の農学部はこの付近にありました。学生だった平田敏彦氏は、初心者向けの緩斜面から、上級者向けの急斜面まであり、その底には小さな池があり、止まれないと池に落ちたと語っていました。



写真1 砂丘の斜面を利用したスキー場 1940(昭和15)年
出典:新潟歴史双書6 新潟砂丘

■ じゅんさい池の渇水

大正時代に作成された「中蒲原郡 - 大形村誌」には、物見山池(西池)と下中道池(東池)が記載され、共に深さ3間(5.4m)と書かれており、かなりの水量があったようです。

その後、「ジュンサイ」が多く収穫されていたことより「じゅんさい池」と呼ばれていましたが、次第に池の水位が低下し1978(昭和53)年には完全に干上がってしまいました。

この原因として、土地区画整理による松林の伐採と、宅地開発により雨水が地下に浸透しにくくなったことがあげられます。これ以外に、1964(昭和39)年の新潟地震により、旧阿賀野川であった0m地帯の排水機能が喪失しました。その対策のため、通船川を4m掘り下げた低水路形式(常時水位マイナス1.65m)としました。この工事後、標高0mに湧き出していたじゅんさい池の湧水の一部が、それより低い通船川方向に流下したことが考えられます(図4b)。

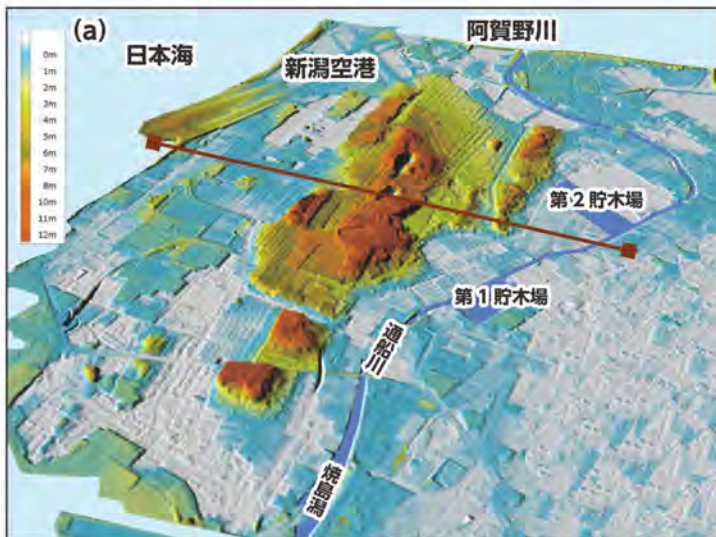


図4 現在の物見山砂丘の地形(a)と日本海～西池～通船川までの断面図(b)

■ じゅんさい池の幸運

一時は池の水が枯渇したじゅんさい池でしたが、現在は豊富な水が池を潤しています。この水は、新潟県が1959(昭和34)年にじゅんさい池の西池から350mほどの場所に建設した山ノ下工業用水場配水池(図3)から、1日あたり400m³供給されているものです。

この用水場があったからこそこのじゅんさい池の復活です。まさに幸運としか言いようがありません。

じゅんさい池をとり囲む樹林

【澤口晋一】

じゅんさい池公園は、2つの池を取り囲む斜面がアカマツ¹⁾を始めとした樹林に覆われていることが大きな特徴です。この点で新潟市内の他の15の湧き池とは異なります。つぎの生き物のコーナーで紹介されるように、じゅんさい池公園では70種類を超える野鳥が確認されているほか、多様な生物が生息しています。これは、じゅんさい池の周囲が樹林に覆われているからに他なりません。ここでは、こうした生き物を育む樹林にみてみます。



樹林を構成する樹木の種類と分布

樹木は大きく針葉樹と広葉樹に、またそれぞれが常緑と落葉との2つに区分されます。このような区分から見ると、じゅんさい池公園の樹林は常緑針葉樹（アカマツ）と落葉広葉樹、常緑広葉樹からなっています。図1はこれら3種の樹木が公園内にどのように分布するかを示したものです²⁾。この図から以下のことがわかります。

- ①アカマツは両池を囲む斜面全体にわたって分布する（写真1）。
- ②落葉広葉樹は両池の縁辺部や浅い凹地のほか、斜面の上部にもみられる（写真2）。
- ③常緑広葉樹は小高木が点在するが、高木はほとんどみられない。これに対し、高さが3～4m以下の低木が斜面全体にわたって繁茂する（写真3）。

樹林のつくり（階層）と樹齢

常緑広葉樹の低木が林床に繁茂していることは、冬に遊歩道を歩いてみるとよくわかります。そこで樹林を構成する上記の3種の樹木と樹高との関係を斜面に沿って調べてみました（図1 A-A'）。その結果、高木層はアカマツ。小高木層は少数の落葉広葉樹、そして常緑広葉樹が低木層を占めることがわかりました（図2）。

次に、これらの樹木の樹齢を調べてみたところ、胸高直径（胸の高さ付近の幹の太さ）が50cmのアカマツの高木で100年前後、落葉広葉樹では直径30cmほどの小高木で20年、高木でも50～60年程度であることがわかりました。一方常緑広葉樹については、低木の中でもやや大きめ（直径20cm、高さ5m）のタブの樹齢が20年でした。これらのことからじゅんさい池公園の樹林は、最初に植林によるアカマツ林の成立と成長、しばらく間をおいて落葉広葉樹の自然定着、そして近年における常緑広葉樹の侵入と繁茂、といった順番で形成されてきたと考えられます。

公園内の林床にはアカマツの実生や幼樹はほぼ見当たりません³⁾。同様に落葉広葉樹の実生・幼樹も決して多くはありません（写真4）。このことは、アカマツ林が衰退すればじゅんさい池公園の樹林は常緑広葉樹林に遷移する可能性の高いことを示しています。将来的にどのような樹林にしていくのが良いのか、考えていく必要があります。

1) 海岸や砂丘地ではクロマツが植林されることが多いが、じゅんさい池ではアカマツとなっている。
2) Google earth(2015年5月)撮影の画像から高木とみられる樹木の林冠をトレースし、これを基図として現地調査を行い作成した。林冠のトレースは可能な限り忠実に行ったが、1本の樹木の林冠を複数本（あるいはその逆）としている可能性もある。その誤差は20%前後である。なお、樹高については10m以上を高木、10m以下を小高木、4m前後以下を低木とした。



図1 じゅんさい池公園の樹林



写真1 東池北岸の樹林



写真2 西池南岸のシロヤナギの高木



写真3 低木層を占める常緑樹

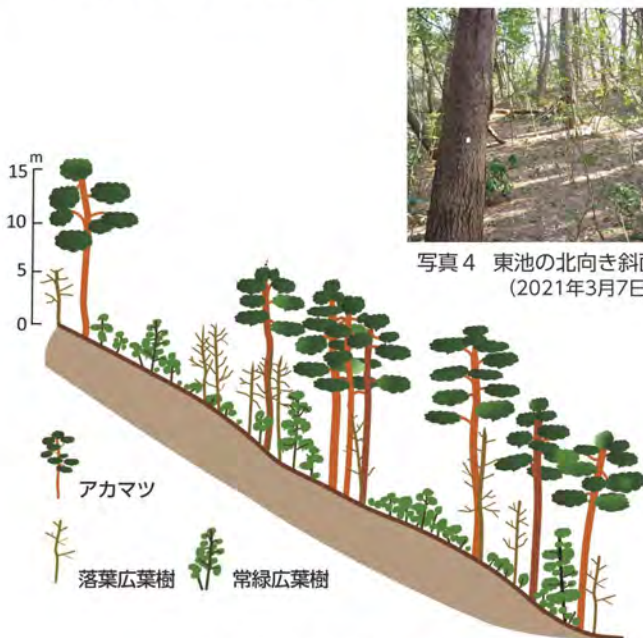


図2 樹林階層図(図1 A-A')



写真4 東池の北向き斜面の林床の様子
(2021年3月7日撮影)



写真5 アカマツの幼樹
(2022年2月1日撮影)

3) 図1の赤の破線で示した範囲は、藪払いが行われており、林床は明るく見通しがよくなっています(写真4)。そのため、歩道沿いの狭い範囲にアカマツの幼樹(2~5年)が10数本程度みられる所があります(写真5)。しかし、これ以外には確認できていません。

じゅんさい池公園の植物

【中村忠士、井上信夫、新潟市環境政策課】

じゅんさい池公園を形づくる自然は、基盤となる砂丘地形や水体、そこに生育する樹木や草本などの植物、そして様々な動物たちなどから成り立っています。これらの要素は相互につながり、影響し合いながら、一つの生態系をなしています。

池の中には様々な水生植物が生育し、周辺はアカマツを主体とした樹林に囲まれています。野鳥によって種子が運ばれてきた植物も加わって、多様な植物相が形成され、四季折々に様々な花や果実を観察することができます。

じゅんさい池公園の代表的な樹木



アカマツ (針葉樹)
赤い樹皮が特徴の高木



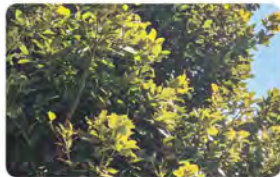
エノキ (落葉広葉樹)
円内は葉と果実 (ヨノミ)



クヌギ (落葉広葉樹)
樹皮に深いひび 円内種子



シロヤナギ (落葉広葉樹)
水際の湿地に生える高木



タブノキ (常緑広葉樹)
成長が早く大木になる



シロダモ (常緑広葉樹)
新葉は葉の裏が白色



ヒサカキ (常緑低木)
林縁で密に枝葉を伸ばす



コムユミ (落葉低木)
林床の細かい枝葉の低木

池の中、水辺の草本植物



ジュンサイ (浮葉植物)
小判型の葉を浮かべる



タヌキモ (食虫植物)
水中葉は細かく枝分かれ



シロバナサクラタデ
岸辺で白い花をつける



ガマ (抽水植物)
ソーセージのような果実

園路わきで見られる花や果実 (注意：ヒョウタンボク・マユミ・センニンソウは有毒)



スイカズラ(花)



ノイバラ



ネムノキ



ヤブガラシ



ヒョウタンボク



ナワシロイチゴ



スイカズラ(実)



ウワミズザクラ



マユミ



ノブドウ



センニンソウ



ヒメアオキ

じゅんさい池公園の鳥類

【浅野涼太、佐藤安男、井上信夫】

じゅんさい池公園は住宅地に囲まれた砂丘地の中に位置していますが、池の中には水生植物が繁茂し、その周囲はアカマツを主体とした樹林に囲まれ、野鳥たちの大切な生息地となっています。これまでに70種類をこす野鳥が記録されています。

- 留鳥：新潟県内で一年をとおして観察できる野鳥。公園内で繁殖することもあります。低山に移動して繁殖するものもあります。
- 夏鳥：春から秋に繁殖のため南方からやってくる野鳥。公園で休憩して繁殖地へと向かいます。
- 冬鳥：秋から春に北方から渡ってきて越冬する野鳥。冬を公園の池や林で過ごします。



コゲラ (■留鳥)
最も小さいキツツキ。クモや昆虫が好物。巣穴径3cm。



カワセミ (■留鳥)
水中にダイブして小魚を捕らえる水辺の宝石。



ヒヨドリ (■留鳥)
茶色いホッペの元気もの。木の実や花の蜜が大好物。



ウグイス (■留鳥)
冬は林床の藪で過ごし、低山で繁殖。日本三鳴鳥の一つ。



キジバト (■留鳥)
林や民家の庭木などで繁殖する。羽色は目立たない。



オナガ (■留鳥)
尾羽が長く、美しい羽色のカラスの仲間。声は濁る。



オオタカ (■留鳥)
林内や池の周辺で野鳥をねらう猛禽。数年前に繁殖。



アオサギ (■留鳥)
大型のサギの仲間。時折池に飛来して魚を捕らえる。



シジュウカラ (■留鳥)
樹上で木の実や昆虫を食べる。市街地でも繁殖。



モズ (■留鳥)
スズメより一回り大きい。小鳥やネズミも狩る小型猛禽。



バン (■留鳥)
西池・東池で毎年繁殖。水草や小魚、エビ等を捕食。



オオルリ (■夏鳥)
オスは鮮やかな青色、メスは褐色。日本三鳴鳥の一つ。



キビタキ (■夏鳥)
メスは褐色。クモや新緑につく幼虫をよく食べる。



コマドリ (■夏鳥)
メスは淡色。さえずりが美しい日本三鳴鳥の一つ。



マヒワ (■冬鳥)
木の実、草の実が主食。群れで移動しながら採餌。



カルガモ (■留鳥)
新潟の水辺で繁殖する唯一のカモ類。北からも飛来。



ツグミ (■冬鳥)
木の実や地面にいる昆虫、ミミズなどを食べる。



シメ (■冬鳥)
パンチのようなクチバシで木の実を割って食べる。



コガモ (■冬鳥)
西池に多数飛来。オスに比べてメスは地味な色彩。



オオバン (■冬鳥)
黒い体に白い額。潜水して水草や小魚などを食べる。

写真提供：日本野鳥の会新潟県 岡田成弘、小野塚達弘

じゅんさい池に住む動物

【井上信夫】

池の中にはエビ類やミズムシなどの甲殻類、トンボのヤゴなど様々な昆虫が住んでいます。両方の池から10種類の魚類、4種類のカメが確認されていますが、多くは持ち込まれたものです。

- 在来種：元々新潟に生息していた種類。この池に水鳥によって運ばれた可能性もあるが、人が持ち込んだ可能性もある。
- 国内外来種：国内の他地域から持ち込まれた。
- 国外外来種：外国原産。オオクチバス、ブルーギル、ウシガエルの北米原産3種は特定外来生物。現在確認されていない。



■ **コイ飼育型** (ニシキゴイ)
黒鯉も住む。県内に住む飼育型は西アジア原産の外来種。



● **ギンブナ** (マブナ)
水生の小動物を捕食。ほとんど全て三倍体のメス。



■ **ゲンゴロウブナ** (ハラブナ)
琵琶湖原産。体高が高く、植物プランクトンが主食。



■ **オオクチバス** (ブラックバス)
西池で駆除した北アメリカ原産の侵略的外来種。



■ **モツゴ**：西日本原産
体は細く、体側の縦条が目立つ。口先は上向きで尖る。



■ **タモロコ**：西日本原産？
モツゴに似るが、ヒゲがあり口先丸く、尾柄に黒点。



■ **ツチフキ**：西日本原産
水底で暮らし、泥中の小動物を捕食。平野部に定着。



■ **ブルーギル**
雑種性で魚の稚魚や卵、水生昆虫や水草まで食害。



● **キタノメダカ**
水面に群れをなして泳ぎ、落下した小昆虫などを捕食。



● **トウヨシノボリ**
ハゼの仲間で、成熟オスは尾柄部に橙色斑がある。



■ **カムルチー** (ライギョ)
アジア大陸原産で、食用に導入。魚やカエルを捕食。



■ **ウシガエル** (食用ガエル)
大型のカエルで、水中から岸辺の様々な動物を捕食。



■ **クサガメ**
中国、朝鮮半島原産。首に黄色い線、背甲に3本の稜線。



■ **ミシシippアカミミガメ**
商品名ミドリガメ。北米原産で、頭側の赤斑が特徴。



■ **アメリカザリガニ**
北米原産。侵略性が高く、様々な水生動植物を捕食。



■ **カワリヌマエビ属の一種**
中国原産。ペットの餌として持ち込まれて大繁殖中。



● **ミズムシ** (甲殻類)
水底で暮らすワラジムシの仲間。腐植質が主食。



● **コムズムシ類** (昆虫類)
水生カメムシの仲間であるが、藻類などが主食。



● **アメンボ**
水生カメムシの仲間。水面に落ちた小昆虫を食べる。



● **イトトンボ類幼虫**
小動物を捕食。体は細長く、腹部の先に3枚の鰓がある。

じゅんさい池のまわりや林に住む動物

【井上信夫】

じゅんさい池では20種類ほどのトンボが確認され、10種類前後が普通に見られます。植え込みや林の中には市街地では珍しくなったヒダリマキマイマイや在来種のナメクジが暮らし、アオダイショウやカナヘビも住んでい

ます。公園内のあちらこちらに、土が盛り上がったモグラ塚を見ることができます。タヌキは住宅地と行き来しており、積雪時には雪上に足跡を見ることができます。



キイトンボ 3~4.5cm
黄色い細身の体で、水際の草の間をぬうように飛ぶ。



モノサシトンボ 4~5cm
腹部に白い環状斑があり、モノサシの名がついた。



コフキトンボ 3.7~4.5cm
水際の草に止まる。オスの体は白い粉をふいたよう。



チョウトンボ 3~4cm
水草が繁る池の上を、幅広い黒い翅でヒラヒラ飛ぶ。



ショウジョウトンボ 5cm
胸部が太め。成熟オスは真っ赤で目立つ水際のトンボ。



アキアカネ 3~4.5cm
初夏に田んぼで羽化し山で避暑。秋に産卵に戻る。



ノシメトンボ 4~5cm
翅の先端が黒いアカトンボの仲間。オスは黒化する。



コシアキトンボ 4~5cm
水辺で暮らす黒い体のトンボ。白色の腰が特徴的。



ウスバキトンボ 4.5~5.5cm
毎年南方から飛来し繁殖する。本土では越冬できない。



シオカラトンボ 4.5~6cm
羽化後の体は褐色、成熟したオスの体は白色になる。



オオシオカラトンボ 6cm
翅の付根は黒色。メスは褐色、オスは白い粉をふく。



オオルリボシヤンマ 9cm
大型のヤンマの仲間。オスは空色の斑紋が鮮やか。



ギンヤンマ 6.5~8.5cm
オスは水色の腹部が鮮やか。池の上をパトロールする。



ナメクジ (フタスジナメクジ)
外来ナメクジが大繁殖する中、生き残った在来種。



ヒダリマキマイマイ
かつては普通種、今では珍しくなったカタツムリ。



セグロアシナガバチ
大型のアシナガバチ。幼虫の餌にアオムシなどを狩る。



ニホンカナヘビ
体は光沢がない赤さび色。草やぶで昆虫などを捕食する。



アオダイショウ
2mになる本土最大のヘビ。ネズミや野鳥などを捕食。



アズマモグラ
地中でミミズなどを捕食。各所にモグラ塚がある。



ホンダタヌキ
雑食性。来園者のいない夜間に園内で活動する。

じゅんさい池が抱える外来種問題

【井上信夫】

市街化が進行する新潟砂丘の中に、奇跡的に残された緑のオアシスじゅんさい池。環境は大きく改変されましたが、砂丘湖の形成過程をうかがい知ることができる貴重な地形が残され、2つの池には多様な水草や水生動物が生息し、周辺の林には様々な草木が生育、たくさんの野鳥も訪れます。

一方、生活力が強い外来動植物や園芸種が繁茂し、貴重な自然に悪影響を及ぼしています。ペットの放流や来訪者の餌やりも、生態系にとって大きな脅威です。

外来種、園芸、飼育品種がおこす環境問題

在来の動植物を捕食し、在来種の餌を奪う

ブラックバス的一种のオオクチバスやブルーギル、ウシガエルは、様々な水生動物、水辺の動物を捕食。コイやアカミミガメ、アメリカザリガニは、水生動物や水草を食害する。

他の植物の生育を阻害、環境を悪化させる

東池の園芸スイレンは水面を被って光をさえぎり、他の水生植物を駆逐する。大量の枯れた植物体が水底に沈んでヘドロとなり、水質を悪化させる。

飼育・園芸動植物の放流、餌やりの問題

鯉やカメの遺棄は「動物愛護管理法」で禁止され、公園管理者は動物に餌を与えないよう呼びかけているが、なかなかならない。カモ類が多数集まると、水質汚濁や水草の食害も懸念される。



西池で捕獲したブルーギルとオオクチバス

北アメリカ原産。2003年、市民団体による駆除が行われ、現在確認できない。



餌付けされたニシキゴイ

新潟県内に生息するコイ、ニシキゴイは西アジア原産。在来のコイは琵琶湖などに限られる。



甲羅干しするアカミミガメ

北アメリカ原産。商品名ミドリガメ。野外に遺棄されたペットが定着、国内の淡水カメの中で最多。



東池のアメリカザリガニ

北アメリカ原産。様々な水生動物や水草を食害。全国に広がり、新潟市内のほとんど全ての湖沼に生息。



園芸スイレン

白花と赤花が定着している。東池を覆い、西池でも拡大中。水底に子どもの腕ほどの地下茎を伸ばす。一端広がると駆除は困難。



西池のフサジュンサイ

北アメリカ原産、商品名カボンバ、キンギョモ。水面下でジュンサイやタヌキモなどの水生植物を圧迫。



水際に繁茂するキショウブ

ヨーロッパ原産で明治時代に持ち込まれた。ピオトープにも植栽されるが、在来のアヤメ類を圧倒。

種名	外来生物法	生態系被害防止外来種リスト	現状
オオクチバス ブルーギル ウシガエル	特定外来生物	緊急対策外来種	生息確認できない
ミシシッピ アカミミガメ	-	緊急対策外来種	東池・西池に生息
アメリカザリガニ	-	緊急対策外来種	東池・西池に生息
フサジュンサイ	-	重点対策外来種	東池・西池に生育 特に西池に多い
園芸スイレン	-	重点対策外来種	東池・西池に生育 特に東池に多い
キショウブ	-	重点対策外来種	東池・西池に生育

特に問題となる外来動植物

北アメリカ原産の**特定外来生物**3種は、現在確認できない。ミシシッピアカミミガメとアメリカザリガニは、これらと同格の**緊急対策外来種**、水生植物3種は**重点対策外来種**指定。飼育品種のコイは特に法律上の指定は受けていないが、雑食性で様々な在来動植物を食害する。

〔外来生物法〕：2006年に施行され、2回の改正が行われた。特定外来生物指定の生物は、飼育・栽培・移動・販売が禁止され、罰則規定も設けられている。

〔生態系被害防止外来種リスト〕：2015年に策定された。国民に生物多様性保全を呼びかけるもので、罰則規定はない。

じゅんさい池の 伝承

【高橋郁丸】

じゅんさい池の湯治場

じゅんさい池の西池には「権現の湯」、東池には「大仏荘」という湯治場がありました。

戦後、復員してきた兵隊たちは皮膚が荒れて苦しんでおり、中にはじゅんさい池に風呂桶を持って行って池の水を沸かして入っている人がいました。そのうちに「皮膚が治った」という人がいて、じゅんさい池の水は皮膚病に効くのではないかという話が広がりました。それが湯治場の始まりのようです。権現の湯は当初、山木戸の人が経営していましたが、昭和30年代に遠藤さんが経営を引き継ぎました。権現の湯には水道はなく、飲み水などは井戸で得ていました。

河渡の共有地であったじゅんさい池を昭和49年頃に市が買い取り、その後の公園計画によって建物が池から離れ「割烹じゅんさい荘」という名称になりました。権現の湯は池の水をポンプでくみ上げて沸かしていました。日帰りの人の多くは最終バスに乗って帰り、なかには、大淵、沼垂、亀田、白根、聖籠方面からの客もいたそうです。農家の人たちは稲の収穫が終わると新米を持って湯治に来ました。その米を預かり、炊いてあげると、客はコンロでみそ汁やおかずを自炊しました。権現の湯は万病に効くと言われていたので足や腰の悪い人もやって来ました。湯に入ったり大広間で歌ったり踊ったりしました。近所の按摩さんも広間で商売をしていたと言います。

龍神さまと上道神社

西池には昔から龍神さまの言い伝えがありました。お題目を唱えると龍神さまが昇るのが見えたという人もいたそうです。

じゅんさい池は河渡の共有地だったので、河渡の女性たちがじゅんさいを採っていました。時期は6～7月で、朝から採って、正午になると業者が池に来て升で計って買っていました。業者は一升瓶につめて旅館や割烹などに売っていました。上道神社由緒によると「昭和二十三、四年頃も度々晴天下の折りにもかかわらずにわかにかき曇り突風起こし荒波を立て一度にしてじゅんさいの採取舟の転覆も龍神の御加護に依って免れたその人々数多く」ということがありました。そこで龍神を祀るため、昭和25年に有志で池の端に奥の院と拝殿を建て、大形神社境外社の上道神社（龍神様）となりました。新潟市がじゅんさい池公園を作った時に神社は道路の方に移動され、平成13年に鳥居を立てて整備しました。祭礼日は6月18日です。



画：高橋郁丸

尊い水

昔から、火の神さまと水の神さまは大切にされていました。今も正月に台所の火所（昔は竈）と蛇口（昔は井戸）に鏡餅をお供えているお宅もあります。井戸の時代、棚を作り小さい鮒を入れたコップを置き、「水神様にあげ申す」と拜んだことがあったそうです。

寒中の水は「寒の水」と言って、漬物に使うと漬物が傷まないなど、神聖なものと考えられていました。そのため、昔は寒中に池の水を汲みに来る人がたくさんいたそうです。



高見謹司さん

※遠藤清さん（松園）高見謹司さん（河渡本町）のお話を元にとまとめました。



写真：いいがたの池沼
一越後野志を巡検ドライブする
三雷健三



遠藤清さん ヨツさんご夫妻

王瀬長者と大助小助の伝説

信濃川には昔から大助小助という鮭の主がおりました。毎年霜月（十一月）十五日水神様の日は、大助小助が信州戸隠さまにお参りに行くので漁師たちは漁を休むことになって



画：高橋郁丸

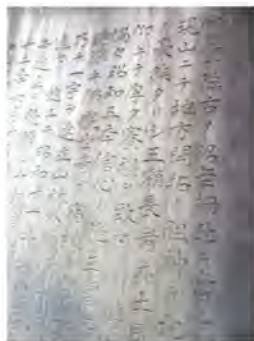
いました。ところが、王瀬の長者は、大助小助を捕まえようと思い、この日に網を入れることにしました。その前の晩、大助小助が長者の夢まくらに立って「捕えるのはやめてください」と頼みましたが、長者は構わずに網をうちまし

た。しかし、一匹も魚がかかりません。このことがあってからまもなく、長者の家は没落したとされています。また、一説に大助小助のことがあってから長者の一族は、ドス（重い皮膚病）にかかって次々に亡くなったと言います。長者は、何とかしてこの病をなおしたいと病に効く薬を大船にいっぱい取り寄せました。その船がようやく海から長者の蔵へ続く細長い入り江に入り、もう少しで蔵へつくという所で、急に沈んでしまいました。長者は大変残念がり、大勢の人に言いつけて入り江の前後をせき止め、薬の御池を作りました。この池は長者ヶ池と言われましたが、土地の人は「ドスケ窪」と呼びました。それがじゅんさい池でした。

河川の侵食のために数度の移転をしていた沼垂は、もともとは今の山ノ下の位置にあったともいわれています。そのころ、王瀬に力のある長者が住んでいました。長者の屋敷は大変広く、その木戸のあった所が、今の上木戸、中木戸、下木戸、山木戸という地名になりました。そして長者が牡丹を植えた場所は牡丹山、藤見をしたところは藤見町と言う地名になったのだそうです。また、ふぐの山という丘に、立派な邸宅を構えていたという話もあ

ります。そのあたりに藤が多かったのでこの名がついたと言うことです。

沼垂の法光院は王瀬の長者の菩提寺と言われ、長者の五輪塔の供養塔が伝わっています。また、昭和14年に法光院二十世が建てた【能救世間苦】の碑が小金町に建っています。そこには、「當丘ハ往古ノ沼垂柵趾ニ當ルト稱セラルヽふぐノ権現山ニテ地方開拓ノ租神ヲ祀リシ所ナリ然レバ土地ノ豪族タリシ王瀬長者亦（また）土民ヲ率中此地ヲ靈山ト仰キテ厚ク賽禮ヲ致セリト傳フ」と刻まれている、



【能救世間苦】の碑

大助小助の伝説とは違い、信仰心の篤い王瀬長者の姿が伝えられています。

このように、王瀬の長者には、たくさんの異説があります。長者は第十二代景行天皇の時に全国を平定するために派遣された

天皇の第五・第六の王子で、淳足の柵を造ってここを支配したのだという話もあります。

なお王瀬町の、ある池の底に長者屋敷の遺物と言う水瓶が埋まっていると言われました。この大瓶は長者の能楽堂の床下に音響調整のために埋めておかれたものだそうですが、今となってはどこなのかわかりません。北区には王瀬長者の親戚と言われる安古左衛門の伝説もあります。王瀬長者や鮭の大助小助にまつわる話は他にもたくさんあります。ぜひ訪ねてみてください。



文献 ○山下太郎（1935）王瀬長者の伝説。高志路，1（5）○新潟市合併町村史編集室（1985）新潟市合併町村の歴史研究報告，6 ○能救世間苦碑（1939年建立石碑）：碑文は小林存による。

地域の取り組み

■ ホタルの里

ホタルの里は、東池に接するごく緩い傾斜地を利用してつくられています。園内の小さな流れは山の下用水場からの工業用水を活用したものです（7ページ参照）、ここで見られるホタルは自然のものではありません。人工飼育されたゲンジ（源氏）ボタルの幼虫を毎年園内の流れに放し、それがやがて成虫となって宵闇を舞っているのです。6月下旬から7月下旬が見ごろです。



写真1 ホタルの里

■ しだれ桜について

東池の駐車場付近に植えられたしだれ桜は、桜博士といわれる京都の佐野藤衛門氏が丹精こめて育てた祇園しだれの血筋を引く銘木で、初代の孫にあたります。4月上旬から中旬が見ごろです。



写真2 しだれ桜

■ 東山の下小学校の取り組み

東山の下小学校では、3年生が「地域の成り立ちや歴史を調べる活動を通して地域の宝を発見し」「なぜ宝と言えるのかを考え」「それを伝える活動」を行っています。その中でじゅんさい池は、見たこともない生き物や美しい草花、空に向かって高く伸びる木々など、魅力的なものにあふれており、地域で育った子どもたちにとって「宝」そのものです。初めは、目に見えるものや聞こえるもの、触れられるものに心を奪われていた子どもたちも、地域の方々との活動を続けるうちに、じゅんさい池の宝は「もの」や「こと」だけでなく「歴史」や「ひとの力」ということに気がきました。そして、「自分たちも地域の一員である」という自覚をもち、学びの発信や新たな町の宝の創造に取り組んできました。

子どもたちにとってじゅんさい池は、自然と

のふれあいや自然からの学習ができる場であると同時に、自然や暮らしを守ろうとする人々の営みに気づき、自分たちの生き方を方向付けてくれる貴重な場でもあります。学びの支えとなる人的環境にも恵まれ、正確な情報を手に入れたり、様々な立場の方のお話を伺ったりしながら、宝を守るために自分たちにできることを考え実践する子どもたちが育っています。じゅんさい池のしだれ桜についての学習は、



写真3 地下水がしみ出す様子を確認する子ども

「校庭のクロマツが新潟地震復興記念の植樹であり、地域の方によって守られてきた」という学校の歴史の掘り起こしにつながりました。また、ホタルの人工飼育についての学習を通して、「今まで鑑賞の対象だった生き物を守るべき対象として再認識する」という経験をしました。そして、「自分がホタルにとって必要な環境を守りつつ、いつか人工飼育に頼らない繁殖への移行に貢献できないか」という思いをもつ子どもも出てきました。じゅんさい池は子どもたちに多くの学びを授けてくれる宝なのです。

校内での学びの蓄積が進んだ近年は、学びを伝える活動に力を入れています。子どもたちは、たくさんの人に身近にある宝を知って親しんでもらいたいと考え、「楽しく・どこでも・繰り返し・自分たちの手を離れても」伝えることができるよう、紙芝居やカルタ、カレンダーを制作し発信しています。（東山の下小学校 渡邊裕子）



写真4 調べたことをカレンダーにして発信

東区特色ある区づくり事業 じゅんさい池みらいプロジェクト

東区では、地域や東区自治協議会が取り組んできた保全活動等の流れを受けて、令和2年度から“じゅんさい池を未来につなぐ”をコンセプトに、「じゅんさい池みらいプロジェクト」に取り組んでいます。

プロジェクトでは、池の環境整備活動や魅力のPRをはじめ、地域の方や有識者から意見を聞きながら、環境保全や活用についての方向性を検討してきました。

じゅんさい池は多様な魅力や価値があります。地域の方々や未来を担う子どもたちがじゅんさい池に親しみや関心を持ち、地域の宝として次世代につないでいくためのきっかけになるよう取り組んでいきます。

代表者のことば

新潟市里潟研究ネットワーク会議座長 新潟国際情報大学教授 澤口 晋一

越後平野にはかつて数えきれないほどの潟があり、人は潟と一体となった暮らしを営んでいました。しかし、近代化の名のもとにそれらの潟は干拓や埋め立てによって姿を消していきました。そのような中であって、幸運にも新潟市内には現在も16の潟が残っています。新潟市里潟研究ネットワーク会議は、この市内に残る16の潟を新潟市の宝と捉え、その魅力と価値を掘り起こし、賢明な利用、保全について考えることを目的とした組織です。こうした活動の一環として、本ネットワーク会議では、新潟市の潟のガイドブックづくりを進めています。これまでに、北区の十二潟と、西蒲区の上堰潟のガイドブックを作成してきました。

潟や湿地の賢明な利用、保全、そのための交流や学習、啓発活動はラムサール条約の支柱であり、SDGs（持続可能な開発目標）の達成にも重要な役割を担うものです。

新潟市にとってかけがえのない存在である潟への理解を、本ガイドブックのシリーズを通じて深めていただければ幸いです。

ラムサール条約の支柱



地域の宝



じゅんさい池に関する
問い合わせ先

- 【ガイドブックに関すること】 …… 環境政策課 Tel 025-226-1359
- 【公園に関すること】 …… 東区建設課 Tel 025-250-2610
- 【みらいプロジェクトに関すること】 … 東区地域課 Tel 025-250-2110

じゅんさい池に関する詳しい情報は「潟のデジタル博物館」をご覧ください。



じゅんさい池みらいプロジェクトの取り組みについての情報はこちらからご覧ください。



◆制作：新潟市・新潟市里潟研究ネットワーク会議 ◆協力：じゅんさい池公園を守る会

◆地域が主役里潟保全事業 じゅんさい池ガイドブック執筆者 ※敬称略

新潟国際情報大学 国際学部教授	澤口 晋一	新潟県立鳥屋野潟公園統括所長	浅野 涼太
じゅんさい池公園を守る会 事務局長	五十嵐初司	生物多様性保全ネットワーク新潟 事務局	井上 信夫
赤塚中学校地域教育コーディネーター	太田 和宏	新潟映像制作ボランティア副代表	加藤 功
水の駅「ビュー福島潟」事務局長	佐藤 安男	新潟県民俗学会理事	高橋 郁丸
じゅんさい池公園を守る会	中村 忠士		

表紙写真：じゅんさい池公園（空撮）、園芸スイレン駆除の様子、自然観察会風景

2021(令和3)年3月 発行
2022(令和4)年3月 改訂